

財団法人国際高等研究所  
2000年度(平成12年度)  
事業報告

1999年に迎えた財団法人設立15周年を節目とし、2000年度は、沢田敏男所長を中心とし、井口洋夫・北川善太郎・松原謙一副所長による運営体制の最後の年度として、21世紀を目前にして新世紀に乗り出す「学者村」の礎を築くために、従来の研究所運営及び研究事業等を中心とした諸事業を再評価した上で、学術研究機能の高度化、国際交流事業の推進をはじめ研究事業を中心とする諸事業の一層の活性化を図った。

これらを通じて、関西文化学術研究都市における中核的機構としての役割を果たすことを目指した。

なお、本研究所の存在意義に鑑み、現在大きな社会問題として顕在化し始めた教育問題について、所長会議及び企画委員会等において検討し、成果を取りまとめた。

2000年度の重点事項をはじめとする事業報告は、以下のとおりである。

## 1. 総括

### [1] 研究所運営体制の充実

#### (1) 所長会議の定例開催

中長期的視点に立った研究所運営及び研究事業の在り方について検討し、迅速かつ適切な意思決定を行うため、正副所長により構成する所長会議を定例的に13回開催した。

#### (2) 企画委員会の機能充実

所長の諮問に応じて研究事業の企画・立案、助言及び評価を行う企画委員に対して「調査研究費」による活動支援を行うなど、基幹的審議機関としての企画委員会の機能充実を図り、年度内に4回の委員会を定期的で開催し、活発な委員会活動を展開した。

### [2] 研究事業の推進

従来の「課題研究」及び「準備研究」という研究事業の枠組みを、2000年度において見直した。

これは、「準備研究」の内容が多様化し、「課題研究」と「準備研究」との境界が不明確になってきた状況に鑑み、「準備研究」をこれまでの予備的・準備的な研究の他に、短期的な研究、年間をとおして継続的に行う学術フォーラム等を加えた枠組みとして再編成し、従来の「準備研究」を「課題研究(B)」に変更したものである。これに伴い従来の「課題研究」を「課題研究(A)」に改称した。

課題研究(A)は、従来の課題研究からの継続研究である4課題と、1999年度の準備研究の成果を踏まえ、課題研究(A)に移行する2課題の計6件を推進した。

- (1) 「生物研究と生命 - 生物学の総合化と生命概念形成への寄与 - 」：継続事業
- (2) 「環境と食糧生産の調和に関する研究 - 人類生存の視野から - 」：継続事業
- (3) 「臨床哲学の可能性 - 生命環境の諸問題を軸として - 」：継続事業
- (4) 「物質研究における多角的協力の構築」：継続事業

- (5) 「高度情報化社会の未来学」：新規採用
  - (6) 「種属維持と個体維持のあつれきと提携」：新規採用
- 課題研究(B)は、1999年度の準備研究の研究期間を延長する3課題と、新規採用である4課題の計7件とした。

- (1) 「政府統治の研究 - 現代日本政府の統治構造 - 」：継続事業
- (2) 「『一つの世界』の成立とその条件 - 鎖国時代の日本とヨーロッパ - 」：継続事業
- (3) 「ヒト遺伝子解析と遺伝子医療の実施に際しての指針の作成  
- ヒト遺伝子解析に伴う倫理問題への対応 - 」：継続事業
- (4) 「多様性の起源と維持のメカニズム  
- 多様性・乱雑性の新しい理解を目指して - 」：新規採用
- (5) 「量子解析と量子情報論の数理」：新規採用
- (6) 「日本統治下における台湾の法文化 - 法律文書に基づく再検討 - 」：新規採用
- (7) 「法観念の比較文化論」：新規採用

さらに、日本学術振興会「未来開拓学術研究推進事業」及び科学技術振興事業団「戦略的基礎研究推進事業」として認められている「特別研究」を引き続き推進した。

### [ 3 ] 研究活動の活性化に向けた取り組み

- (1) 「招へい学者 (IIAS Fellow)」の招へい
- 本研究所の研究環境を活かし、研究活動の活性化を図るため、国内外の卓越した研究者を「招へい学者 (IIAS Fellow)」として招へいする制度により、2000年度には国内外より8名の研究者を招へいした。
- (2) 「特別研究員」制度による若手研究者の育成
- 優秀な若手研究者の研究を奨励するために設けた、採用期間2年を限度とする「特別研究員」制度により、2000年度には新たに2名を採用し、計4名に対して課題研究や特別研究等の推進をとおして若手研究者の育成を図った。
- また、特別研究の研究事業に若手研究者を参加させ、研究の進展を促進するとともに、若手研究者の育成を図ることを目的とする「研究員」制度により、2000年度に新たにフランス人研究者1名を採用し、計2名の研究員の育成を図った。

### [ 4 ] 研究成果の取りまとめ及び評価

1999年度で終了した研究プロジェクトについては、その研究成果を2000年度内に取りまとめるとともに、学術出版や研究成果を一般に公開する講演会の開催等、研究成果の公表に努めた。また評価システムのあり方についても検討を行った。

### [ 5 ] 研究環境の整備及び情報発信機能の充実

本研究所の情報基盤を整備・拡充し、高度情報化に向けた取り組みを推進した。情報メディアを活用し、研究活動及び研究成果の公表を行うとともに、学術出版や広報活動等についても積極的な展開を図った。

## [ 6 ] 研究事業費確保への取り組み

厳しい経済環境下における研究事業費の確保は重要な課題である。1999年度においては、文部省、特殊法人から引き続き助成を受けた。

### ( 1 ) 文部省科学研究費補助金「特定奨励費」

文部省からは前年度に引き続き、科学研究費補助金「特定奨励費」の助成を受けた。主テーマを「生物の生存と維持に関する多分野の横断的基礎研究」として交付申請を行い、学術審議会による審査を経て総額3,900万円が交付された。これにより主テーマの下に広範な研究事業の推進を図った。

### ( 2 ) 日本学術振興会「未来開拓学術研究推進事業」

「情報市場における近未来の法モデル」を研究テーマとする特別研究を推進した。1998年度より5年間の研究事業として認められた日本学術振興会の「未来開拓学術研究推進事業」である。2000年度の事業実績額は、8,248万円であった。

### ( 3 ) 科学技術振興事業団「戦略的基礎研究推進事業」

「器官形成に関わるゲノム情報の解読」を研究テーマとする特別研究を推進した。1998年度より5年間の研究事業として認められた科学技術振興事業団の「戦略的基礎研究推進事業」である。

## [ 7 ] 受託研究「宇宙ステーション等の人文社会的利用法に係わる調査研究」

宇宙開発事業団(NASDA)より、2000年度において「宇宙ステーション等の人文社会的利用法に係わる調査研究(その3)」を受託した。本年度の事業実績額は、299万円であった。

## [ 8 ] 共同研究

京都大学数理解析研究所との共同研究を推進するため、2000年度において新たに協定を締結して、数理科学分野における共同研究の推進体制を整備した。

さらに、奈良女子大学との間で新規の共同研究を推進するために協定を締結し、事業化を図った。

## [ 9 ] 情報出版事業

研究事業における学術成果などを報告書(Report)として出版公表した。また、本研究所で行われた学術的講演の多彩な成果を分かり易く取りまとめて「高等研選書」として発行した。これら学術出版については、インターネット出版として事業化を推進した。

広報活動としては、広報誌「こうとうけん」や「IIAS NEWS LETTER」を発行し、ホームページでの情報公開の充実を図った。

## 2. 研究事業の推進

### [ 1 ] 課題研究 (A)

課題研究 (A) は、中・長期を展望した研究テーマについて、計画的に推進する課題探索型の基礎研究である。

2000年度における課題研究 (A) は、従来の課題研究からの継続研究である4件の研究事業と、1999年度の準備研究の成果を踏まえ、課題研究 (A) に移行する2件の研究事業の計6件を推進した。

#### ( 1 ) 「生物研究と生命 - 生物学の総合化と生命概念形成への寄与 - 」

本研究事業は、1997年度における準備研究の研究成果を踏まえ、98年度から課題研究として新規に立ち上げた課題研究であり、2000年度を以て終了した。

研究代表者：中村 桂子 JT生命誌研究館副館長・国際高等研究所特別委員

専門：生命科学・生命誌

##### 1) 研究事業の趣旨・概要

20世紀は、DNAの二重らせん構造の発見に象徴されるように、人間を含むあらゆる生物の共通性を認識し、生物を分子機械と見なして、その構造と機能の解明に専心した。共通性を基盤にした生命観の提出という意味でも、これは大きな成果であると言ってよい。しかし、それはまた生物の多様性、歴史性、関係性、一回性などを忘れさせることにもつながったと考えられる。

21世紀を迎えるにあたって、このような視点を踏まえた総合生物学（分子生物学、遺伝学、発生生物学、進化学、形態学、分類学などを統合した新たな学問体系）が生まれつつある。そこでは、DNAの共通性のみにも重きを置いた生命観とは異なる新しい生命観が生まれつつある。本課題研究は、総合生物学誕生の動きを把握し、新しい生命観を探ることを目的とする。

本課題に取り組む間に、急速に生物研究を取り巻く状況が変わり、21世紀日本の生物研究の中心になるべき世代が、じっくり生物学の方向を定め、明確なコンセプトの下に研究を進めるといった雰囲気は失われた。そこで、本研究で統合生物学として提案しようとしていたものを、できるだけ多くの現役生物学と共有することが必要となったため、1999年度の研究はその1点に絞った。これを踏まえ、2000年度は最終年度として研究事業の集大成を図るべく、その流れを踏まえた総合生物学の概念の構築を目指した研究事業を展開した。

準備研究を含め4年間の研究事業をとおして得られた知見に基づき研究成果報告書を取りまとめた。

##### 2) 研究集会の開催状況：2回開催

第9回研究会（6月28日）

第10回研究会（11月1日）

#### ( 2 ) 「環境と食糧生産の調和に関する研究 - 人類生存の視野から - 」

本研究事業は、1997年度における準備研究の研究成果を踏まえ、98年度より課題研究として新規に立ち上げた課題研究であり、2000年度を以て終了した。

研究代表者：渡部 忠世 京都大学名誉教授・国際高等研究所企画委員

専門：農学・作物学

##### 1) 研究事業の趣旨・概要

人口の増大に伴って、環境問題と食糧生産のジレンマは拡大していく。この地球上に人

類が生存を続けていくためには、両者の調和をどこに求めたらよいのか。その解決はもちろん簡単ではないが、人類が抱える最も緊急な課題の一つである。

本課題研究は、当面、地球および地域環境論、食糧生産、人口問題、発展途上国の課題、そして国際食糧問題と食糧政策などの分野の経験豊かな専門家を集めて共同討議を重ね、学際的なアプローチによって、上記の諸問題の解決の手がかりを得て、その総観的な見取り図を描き出すことを目的とした。

その上で重点的な分野について、それぞれの位置付けを確認しながら、個別的な研究を推進した。

2000年度は、最終年度としての集大成を図るべく、研究成果の取りまとめを視野にいたした活動を行った。特にアジア・アフリカのパラダイムを整理し、環境と食糧生産の調和をどこにどのようにして求め得るかという一つの提言に結びつけることを狙った。

## 2) 研究集会の開催状況：4回開催

第14回研究会（5月12日～13日）

第15回研究会（7月14日～15日）

第16回研究会（10月6日）

第17回研究会（2001年2月9日～10日）

## (3) 「臨床哲学の可能性 - 生命環境の諸問題を軸として - 」

本研究事業は、1998年度における準備研究の研究成果を踏まえ、99年度より課題研究として新規に立ち上げた課題研究である。

研究代表者：野家 啓一 東北大学大学院文学研究科教授・国際高等研究所企画委員  
専門：哲学・科学哲学

### 1) 研究事業の趣旨・概要

「臨床哲学（clinical philosophy）」とは、現実社会の具体的場面で生じる哲学的な治療を必要とする問題を、自らも「医者」ではなく「患者」の一人として考えていこうとする新しい哲学的活動を指している。

本課題研究では、この臨床哲学を取り上げ、従来の哲学のようなアカデミズムの内部で抽象的な「一般的原理」の探求を目指すのではなく、具体的な「個別事例」から出発することによって既成の原理を揺さぶり、新たな概念の思考スタイルを紡ぎ出すことを試みることを目的とする。すなわち、「臨床哲学」といういまだ搖籃期にある学問に明確な輪郭を与え、その方法論を確立するとともに、具体的な実践活動への橋渡しをすることにある。

取り組むべき課題は多岐にわたるが、今回の研究では、特に「生命環境」を巡る諸問題に焦点を絞って取り組む予定である。具体的には遺伝子操作、介護と看護、生殖技術、環境倫理、ジェンダー、ボランティア活動などの問題である。それらの検討を通じて「臨床の知」と言えるものの構築を目指すことが当面の目標となる。

具体的には、次の課題について問題意識を深化させるとともに、臨床哲学の具体的な姿を明らかにすることを目指す。

「臨床哲学」の基礎理論

「生命圏」の文化政治学

「生活圏」の倫理学

2年目に当たる2000年度の研究においては、コア・メンバー相互の討論を通じて臨床哲学の基礎理論の構築を目指すと同時に、社会のさまざまな分野で実践活動に携わっておられる方々から話を伺うことによって、臨床哲学のフィールドを拡げるとともに、その

中から新たな課題を発見することに努めた。

前年度に行われた5回にわたる研究会の成果を踏まえながら、3回の小規模研究会、中村雄二郎氏を迎えての「公開セミナー」、およびクリスティーネ・コウノ氏を迎えての「国際シンポジウム」を開催した。それらを通じて、一方では研究発表や合評会を通じてコア・メンバーの間で臨床哲学に対する共通の理解を形成しながら、他方ではゲスト・スピーカーの方々から社会の現場での実践的課題についてお話をいただき、問題意識の深化に努めた。研究会、公開セミナー、国際シンポジウムの具体的内容は以下の通りである。

2) 研究集会の開催状況：4回開催

第6回研究会(6月17日～18日)

第7回研究会(8月5日)

第8回研究会(10月7日)

第9回研究会(12月9日)

第10回研究会(2001年2月18日)

(4) 「物質研究における多角的協力の構築」

本研究事業は、1998年度における準備研究の研究成果を踏まえ、99年度より課題研究として新規に立ち上げた課題研究である。

研究代表者：金森順次郎 大阪大学名誉教授・国際高等研究所特別委員

専門：物性物理学

1) 研究事業の趣旨・概要

現在、物質科学とその関連諸分野では多くのプロジェクトが走っているが、それぞれ当初の目的に応じた人員構成になっていて、新しい発展を目指すときの他グループとの協力の手掛かりが少ない場合がある。この課題研究はプロジェクト横断の企画をたて、異分野を繋ぐ新しい協力関係を作り、次の新しい発展の出発点を構築することを目的とする。1999年度にそれぞれの企画を具体的にスタートさせたが、本年度はその成果を土台にして、新しい展開を目指す。

企画1 目標：工学と物質科学の新しい接点の模索

主題：物質科学の発展に基づく光・電子システムインテグレーション

企画2 目標：計算科学を通じての化学と物理の融合

主題：触媒作用の原子プロセス等

企画3 目標：物質開発と理論物理の協力

主題：遷移金属酸化物等の強相関電子系の相変化

企画4 目標：物質開発に関わる数理の建設

2) 研究集会の開催状況：7回開催

第1回研究会(5月25日)

第2回研究会(5月31日～6月3日)

第3回研究会(7月1日)

第4回研究会(8月23日～24日)

第5回研究会(9月13日)

第6回研究会(10月3日～4日)

第7回研究会(2001年1月19日)

## (5) 「高度情報化社会の未来学」

本研究事業は、1999年度における準備研究の研究成果を踏まえ、2000年度より課題研究として新規に立ち上げた課題研究である。

研究代表者：坂井 利之 京都大学名誉教授・国際高等研究所特別委員  
専門：情報工学

### 1) 研究事業の趣旨・概要

本課題研究は、地球的規模における社会、産業、学術、文化、研究の現在の動向を把握し、中・長期的、未来学的視点から、人類、環境、生態系、産業技術、学問研究のあり方を見出すことを目標とする。

科学技術を駆使して人類が地球自然環境に重大な影響を及ぼすに至った工業社会においては、人類を育む自然環境と産業技術・人間活動をどのように調和させるかが最重要課題であった。次に訪れる高度情報化社会では、2つのことが最重要課題となるであろう。一つはサイバー空間の基盤となる情報技術であり、他の一つは好むと好まざるに拘わらず、不可避的な人間・キカイ共存系（インフォスフェア）での新しい人間の組織、制度、秩序の構築である。

高度情報化社会においては、国家、法律、通貨、慣習、生活などのいずれにおいても、全く未踏の新天地が始まるであろう。空間・時間ともに拡大・縮小の両方向をもつカオスからの出発の中で、われわれは人間の組織・集団および個人としてのあり方、生き方を一歩・一歩方向を間違わずに確実に進めていかなければならない。「どうなるのか」、「どうするのか」の未来学を、走りながら、学問、教育、実践、そして産業・文化・福祉社会の構築に結びつけていかなければならない。

本研究では、4つの分科研究会（情報技術分科会、ボーダレス社会分科会、人間倫理・教育分科会、規範ルール分科会）を組織してそれぞれの分野に関する研究を行うと共に、全体会議を持って、包括・効率的に研究を推進し、適切なタイミングで世に問うべきメッセージを広く社会に発信することを目標とする。

### 2) 研究集会の開催状況：4回開催

第1回研究会（5月26日～27日）

第2回研究会（9月1日～2日）

第3回研究会（12月8日～9日）

学術公開シンポジウム（2001年1月19日）

## (6) 「種属維持と個体維持のあつれきと提携」

本研究事業は、1999年度における準備研究の研究成果を踏まえ、2000年度より課題研究として新規に立ち上げた課題研究である。

研究代表者：岡田 益吉 筑波大学名誉教授・国際高等研究所企画委員  
専門：発生生物学

### 1) 研究事業の趣旨・概要

本課題研究の目的は、種族維持と個体維持という生物にとってはどちらも欠くことのできない営みの全体像を両者の関わりに重点を置き、進化をも視野に入れてダイナミックに浮き彫りにすることである。

生殖細胞の形成、移動、成熟、性決定など生殖細胞の細胞学的、遺伝学的特質についての理解の現状を明確に把握する。さらに、生殖細胞が個体の中で体細胞に対してどのよう

に振る舞うか、また反対に体細胞は（あるいは個体全体としては）生殖細胞をどのように扱うか、また両者はどのような仕組みで協調、提携するか、その仕組みは進化の過程でどのようにしてできてきたかなどについても議論を進めることを目標とする。

一方、体細胞から次世代の個体が作られる無性生殖も視野に入れる。無性生殖と有性生殖とは基本的に異なるものであるのか、あるいは共に次世代の個体を産み出す機構であるという観点から見れば、共通する仕組みが存在するものかという点についても議論する。

また、有性生殖を個体レベルから俯瞰して個体としての行動に見られる種族維持への協力、自らの生存には殆ど何の利するところのないその協力活動の実行が、個体に及ぼす影響などについても考察する予定である。

## 2) 研究集会の開催状況：3回

第1回研究会（5月10日～11日）

第2回研究会（7月26日）

第3回研究会（11月30日）

## [ 2 ] 課題研究 (B)

課題研究 (B) は、中・長期を展望した課題について、研究項目、研究方法、研究組織等の検討を行う研究、及び特定の研究テーマについて行う短期的な研究または学術フォーラムとした。

2000年度の課題研究 (B) は、1999年度の準備研究の研究期間を延長する3件の研究事業と、新規採用である4件の研究事業の計7件である。

### ( 1 ) 「政府統治の研究 - 現代日本政府の統治構造 - 」

研究代表者：本間 正明 大阪大学大学院経済学研究科教授・国際高等研究所特別委員  
専門：公共経済学

本研究は、1998年度ならびに1999年度の準備研究に引き続き1年間の研究期間の延長によって対応を図ることとした。2000年度においては、研究会を1回開催（9月4日～5日）して、これまでの研究成果の総括を行い、取りまとめに向けた取り組みを行い、事業を終了した。

### ( 2 ) 「『一つの世界』の成立とその条件 - 鎖国時代の日本とヨーロッパ - 」

研究代表者：中川 久定 京都大学名誉教授・国際高等研究所特別委員  
専門：フランス文学

本研究は、1999年度の準備研究に引き続き1年間の研究期間を延長して実施した。

研究会を3回開催（7月26日～27日、12月14日～15日、2月17日～18日）して、研究成果の総括を行い、今後の展開の可能性について検討した。その結果、次年度における課題研究 (A) への移行を決定した。

### ( 3 ) 「ヒト遺伝子解析と遺伝子医療の実施に際しての指針の作成 - ヒト遺伝子解析に伴う倫理問題への対応 - 」

研究代表者：武部 啓 近畿大学原子力研究所教授・国際高等研究所特別委員  
専門：遺伝学

本研究は、1998年度ならびに1999年度（6ヶ月間）における準備研究「ヒト遺伝子解析及び遺伝子医療に伴う倫理問題とそれへの対応」の内容を引き継ぐ課題として取り上げることとし、2000年度に6カ月間の研究期間の延長により対応を図った。

本年度においては、研究会を1回開催（8月8日）して、これまでの研究成果の総括を行い、事業を終了した。

（4）「多様性の起源と維持のメカニズム - 多様性・乱雑性の新しい理解を目指して - 」

研究代表者：吉田 善章 東京大学大学院新領域創成科学研究科教授  
国際高等研究所特別委員  
専門：プラズマ物理学、数理科学

副課題「巨視的乱雑系の力学」

研究分担者：巽 友正 京都大学名誉教授

研究会は3回開催（8月17日～26日、12月15日～16日、2月10日）して、研究成果の総括を行い、今後の展開の可能性について検討した。その結果、次年度における課題研究（A）への移行を決定した。

なお、副課題として取り組んだ「巨視的乱雑系の力学」については、次年度における課題研究（B）学術フォーラムとしての事業の継続を決定した。

（5）「量子解析と量子情報論の数理」

研究代表者：藤田 宏 東京大学名誉教授・国際高等研究所企画委員  
専門：関数解析学

副課題「量子解析の理論の発展と応用の拡大 - 非線形現象の数理と量子解析 - 」

研究分担者：鈴木 増雄 東京大学名誉教授

副課題「量子情報論の数学的側面からの構築 - 量子情報論の数理 - 」

研究分担者：飛田 武幸 名古屋大学名誉教授

研究会は4回開催（9月19日～21日、11月17日～19日、11月28日～29日、2月20日～22日、3月6日～7日）して、研究成果の総括を行い、今後の展開の可能性について検討した。

その結果、副課題「量子解析の理論の発展と応用の拡大」については次年度において京都大学数理解析研究所との共同研究のテーマとして採用できるかについて検討することとなった。

また、副課題「量子情報論の数学的側面からの構築」については、次年度における課題研究（B）としての事業の継続を決定した。

（6）「日本統治下における台湾の法文化 - 法律文書に基づく再検討 - 」

研究代表者：チェン, ポール 東京大学大学院法学研究科教授・国際高等研究所企画委員  
専門：法哲学

本年度においては研究会を2回開催（5月30日、2月15日）して、研究成果の総括を行い、今後の展開の可能性について検討した。さらに、2回の現地文献調査（12月19日～22日、3月21日）を行った。

その結果、次年度における課題研究（B）学術フォーラムとしての事業の継続を決定した。

（7）「法觀念の比較文化論」

研究代表者：上山 安敏 京都大学名誉教授・国際高等研究所企画委員  
専門：西洋法制史・法哲学

研究会は3回開催（6月10日～11日、10月9日、11月25日～26日）して、研

研究成果の総括を行い、今後の展開の可能性について検討した。その結果、次年度における課題研究(B)としての事業の継続を決定した。

### [ 3 ] 特別研究

本研究所が、事業主体との間で委託研究契約または共同研究契約を締結して推進する事業の内、特に大型の予算を組み、数年に亘る研究期間を予定する特殊性などを考慮して、特別の推進体制や研究の枠組みを設けて推進する研究事業を「特別研究」とした。

2000年度においては、98年度から特別研究として採用された次の2課題を引き続き推進した。

#### ( 1 ) 「情報市場における近未来の法モデル」

本特別研究は、1997年度における準備研究「21世紀の法モデル」の研究成果を踏まえ、日本学術振興会「未来開拓学術研究推進事業」に対して98年度の新規研究プロジェクトとして「情報市場における近未来の法モデル」を申請し、認められた研究事業である。2000年度においても継続事業として推進した。

契約形態 : 受託研究  
研究期間 : 1998年度～2002年度(5年間)  
研究代表者 : 北川善太郎 国際高等研究所副所長  
2000年度受託事業費の総額 : 82,481,042円  
2000年度研究集会の開催実績 : 15回

#### ( 2 ) 「器官形成に関わるゲノム情報の解読」

本特別研究は、科学技術振興事業団「戦略的基礎研究推進事業」に対して1998年度の新規研究プロジェクトとして「器官形成に関わるゲノム情報の解読」を申請し、認められた研究事業である。2000年度においても継続事業として推進した。

契約形態 : 共同研究  
研究期間 : 1998年12月～2003年11月(5年間)  
研究代表者 : 松原 謙一 国際高等研究所副所長  
研究推進体制 : 本研究所では全体総括を行い、具体的な研究は共同研究機関である奈良先端科学技術大学院大学等で実施した。

### [ 4 ] 共同研究

#### ( 1 ) 京都大学数理解析研究所との共同研究

1997年度から開始された京都大学数理解析研究所との共同研究は、1999年度を以て当初予定した3年間の共同研究期間を終了したが、諸般の状況に鑑み、2000年度からも引き続き事業化を図るための協議を行い、共同研究に関わる協定を再度締結して、継続した共同研究体制を整備した。

#### ( 2 ) 奈良女子大学との共同研究

2000年度において、新たに奈良女子大学との間で共同研究に関わる協定を締結し、「歴史的な概念としての「日本」の形成と変容 - 意識としての古代の時間・空間およびその場におけるイデオロギーと儀礼との相関関係を軸として - 」をテーマとする新規の共同研究を開始した。研究期間は、2000年度～2002年度(3年間)。

研究代表者 : 広瀬 和雄 奈良女子大学大学院人間文化研究科教授(考古学)

研究会を2回開催し、第2回研究会の開催に合わせて一般公開講演会を開催した。

第1回研究会(8月24日~26日)

第2回研究会(2001年1月13日)

一般公開講演会:内容は別項目を参照。

## [5] 受託研究

### (1) 宇宙開発事業団からの受託研究事業

米国・ロシア・欧州・カナダと日本による国際共同事業として、地球周回軌道上に国際宇宙ステーションの建設が1998年11月に開始され、来る21世紀初頭にはその全容が現れる。わが国においては、宇宙開発事業団(NASDA)が宇宙ステーション取り付け型日本実験モジュール(JEM:通称「きぼう」)を開発し打ち上げる計画であり、本格的な宇宙時代を迎える。

従来取り組まれてきた自然科学や医学、工学以外の分野での、より広い観点から中長期的視点に立った宇宙ステーションの活用方を検討するため、国民に理解され易く、共感が得られる人文社会的視点での利用の可能性ならびに今後の人文社会的利用が目指すべき方向と課題を明らかにすることを目的とした調査研究である。

本調査研究は、同事業団による1996年度~97年度の受託研究「JEMの人文社会的利用法に係わる調査研究」の成果を踏まえ、98年度以降において新たに「宇宙ステーション等の人文・社会学的利用に係わる調査研究」をテーマとする事業を受託し、2000年度においても継続事業として推進した。

これまでの調査研究で一応の成果が明らかになった芸術分野をき、2000年度においては、人文社会学分野の有識者に、宇宙ステーション及び宇宙飛行士の活動についての理解度の深化を図り、宇宙ステーションにおける人文社会的利用の意義、利用可能性及び具体的な課題等について幅広く意見の聴取を行い、今後の人文社会的利用の具体的な方法、及び課題について検討した。

受託研究事業の規模:2,992,500円

## [6] 懇談会・学術フォーラム

### (1) わが国における教育問題に対する取り組み

IIASフェローであった田丸謙二東京大学名誉教授(招へい:1999年10月5日~12月25日)からの教育問題への積極的な関与に関する提案を受けて、本研究所として討論すべき「教育」問題を意識した幅広い検討を行うため、「国際高等研究所における『教育』に関する問題検討会」を2000年1月29日に開催した。

これにより、今後の取り組むべき指針が明らかにされ、以下の懇談会及び学術フォーラムを開催することとし、多角的な方面から集中的に検討した。

#### 「教育問題に関する懇談会」

懇談会開催:3回(4月21日、7月7日、2001年1月20日)開催した。

#### 「人間教育の生物学的基礎 - 教育改革の新しいアプローチ - 」

代表者:井口 潔 九州大学名誉教授(外科学)

研究会開催:2回(6月19日~20日、10月20日)開催した。

## (2) 「宇宙ステーション等の人文社会的利用に関する検討フォーラム」

宇宙開発事業団からの受託研究を推進する一環として、中川久定京都国立博物館館長を座長とする「宇宙ステーション等の人文社会的利用に関する検討フォーラム - 普通の人宇宙飛行 - 」を2001年3月3日に開催し、国際宇宙ステーションの人文社会的活用と有人滞在に関する問題点及び課題について意見交換を行った。

## 3. 教育研修・育成事業

### (1) 情報生物学「適塾」 - 集中トレーニング・コース -

#### 1) 趣旨・目的

ヒトゲノム計画の急速な進展に伴い、生命の研究者は大量の情報を扱って仕事を進めなくてはならぬ事態となり、21世紀の初頭には、更にこのような状況が加速、拡大することが見込まれている。

この大量情報はゲノムの構造解析やゲノムの機能の解析に留まらず、タンパク質の諸情報、データベースの作成や活用、医学・薬学などの各種生物学情報データベースとのリンク、データの評価・比較研究、データマイニングなど、極めて多量の情報群からなるが、これまでそれらをまとめたものとして取扱う機会は限られていた。

我が国では、ミレニアムプロジェクトの実施以来、バイオインフォマティックスのできる人材が強く求められているが、需要に応じられていないのが現状である。更に将来を見据えると、生物科学と情報科学の両方を体得し、新しい分野、つまり「情報生物学」を開拓する人材の育成を早急に行わなければならない状況にあるが、現在のところそのような教育システムは存在していない。

このような状況を考慮し、国際高等研究所は、文部科学省、科学技術振興事業団、社団法人関西経済連合会、日本生物情報学会の協力を得て標記集中トレーニングコースを開設し、特に熱意のある受講生を選考し、我が国で得られる最高レベルの講師陣にボランティアで参加していただき、「適塾」の精神にのっとった人材の育成を早急に行おうとするものである。

#### 2) 開催期間

2001年3月24日～4月11日

#### 3) 受講対象者及び定員

受講対象者は、大学の学部・大学院に在籍する学生、又は大学・研究所等の研究機関に所属する若手研究者（大学の助手相当まで）で、高度な講義及び実習を理解できる者10名を定員として公募した。短期間の募集ではあったが広く全国から32名の応募があり、外国人1名を含む11名を受講者とした。

#### 4) 今後の展開

本年度の実績を踏まえ、次年度以降の展開を検討することとなった。

## 4. 卓越した研究者の招へい

本研究所の優れた研究環境を醸成するため、本研究所の研究施設を活かし、研究活動の活性化を図るため、国内外の卓越した研究者を「招へい学者 (IIAS Fellow)」として招へいする制度を活用し、2000年度においては8名の研究者を招へいした。

招へい学者は、原則として年度をとおして2ヶ月間本研究所に滞在し、自らの研究を推進すると

共に、国内外の研究者との研究交流を通じて、本研究所の研究活動の推進を図った。

なお、滞在期間中またはその後のしかるべき時期に、当該招へい学者を講師として、一般を対象とする公開講演会を開催し、また次年度開催に向けた準備を行った。公開講演会の概要は、別項目参照。

招へい学者（IIAS Fellow）と招へい期間は次のとおりである。

- 1) 久城 育夫 東京大学名誉教授（専攻：地球物理学）  
招へい期間： 4月 1日～ 5月14日
- 2) 古在 由秀 国立天文台名誉教授（専攻：天体力学）  
招へい期間： 9月28日～2001年3月末
- 3) 小堀 鐸二 京都大学名誉教授（専攻：建築学）  
招へい期間： 9月 5日～2001年3月末
- 4) 酒井 修 京都大学名誉教授（専攻：西洋近現代哲学）  
招へい期間： 6月27日～2001年3月末
- 5) 坂本 慶一 京都大学名誉教授（専攻：農業経済学）  
招へい期間： 5月 9日～ 7月 8日
- 6) 南部陽一郎 シカゴ大学名誉教授（専攻：理論物理学・素粒子論）  
招へい期間： 5月16日～ 6月15日
- 7) 星野 一正 京都大学名誉教授（専攻：臨床医学・基礎医学・生命倫理学）  
招へい期間： 5月16日～2001年3月末
- 8) 山崎 敏光 東京大学名誉教授（専攻：原子核物理学）  
招へい期間： 11月 8日～2001年3月末

#### 5. 若手研究者への研究助成（「特別研究員」制度及び「研究員」制度）

若手研究者の育成を目的とし、優秀な若手研究者の研究を奨励するための研究奨励金を支給する特別研究員制度を創設し、1997年度より事業を具体化させた。2000年度には新たに2名の大学院博士課程修了者を採用し、4名の特別研究員の育成を図った。

また、1999年度より特別研究の研究事業に若手研究者を参加させ、研究の進展を促進するとともに、若手研究者の育成を図ることを目的とする「研究員」制度を新たに設けた。1999年度に採用された2名のうち、2000年度には特別研究員に採用された1名を除き1名が研究員を継続した。さらに、フランス人研究員1名を採用した。

##### （1）「特別研究員」

- 1) 齊藤 宣一 特別研究員 （採用期間：1999年4月～2001年3月）
- 2) 北 浩子 特別研究員 （採用期間：1999年4月～2001年3月）
- 3) 山名 美加 特別研究員 （採用期間：1999年4月～2001年3月）
- 4) 浅井 暢宏 特別研究員 （採用期間：1999年4月～2001年3月）

##### （2）「研究員」

- 1) 上野 達弘 研究員 （採用期間：1999年4月～2001年3月）
- 2) セリーヌ・メナージ 研究員（採用期間：2000年4月～2001年3月）

## 6. 日本学士院・日本学術振興会及び学協会等への支援・共催事業

日本学士院や日本学術振興会及びその他の学協会等への積極的な支援協力をとおして、国際高等研究所の存在意義をより高めることを目的として、これら学術機関からの正式な協力要請に基づき、学術機関が行う事業を本研究所との共催事業あるいは支援事業として共同開催した。

### (1) 日本学士院第32回一般学術公開講演会

日本学士院が例年開催する日本学士院会員を講師とする一般向け学術公開講演会を、国際高等研究所との共催事業として5月20日に開催した。講演会の内容は別項目を参照。

なお、これに併せて学士院会員と高等研関係者との懇談会を開催した。

### (2) 第6回日印合同科学評議会

日本学術振興会からの正式な協力要請に基づき、日印合同科学評議会が本研究所において2000年12月21日に開催された。

## 7. 一般公開事業・セミナー事業

本研究所が、けいはんな学研都市の中核的な研究所として広く認知され、その活動内容に対する理解を深めて貰うため、さらに学術研究に関わる最前線的话题を、広く一般に提供するという学術機関としての使命を果たすため、IIASフェロー公開講演会などの一般公開事業を企画・開催した。

### (1) IIASフェロー公開講演会

- 1) 田中郁三フェロー公開講演会 : 「夜を明るくする話 - 光ってなに?」 (4月22日)
- 2) 飛田武幸フェロー公開講演会 : 「美しいノイズ - もっと数学を身近に - 」  
(6月10日)
- 3) 星野一正フェロー公開講演会 : 「インフォ - ムド・コンセントとは - 賢い患者になるために - 」  
(6月24日)
- 4) 久城育夫フェロー公開講演会 : 「地球と月の生い立ち - マグマの果たした大きな役割 - 」  
(9月30日)
- 5) 酒井 修フェロー公開講演会 : 「現代とはどういう時代なのか - 哲学者の視点から - 」  
(11月25日)
- 6) 山崎敏光フェロー公開講演会 : 「反物質の科学」 (2001年3月24日)

### (2) 研究成果公表学術公開講演会

- 1) 「言語の脳科学」プロジェクト学術公開講演会 (2000年6月17日)  
メインテーマ: 「言葉と脳」
- 2) 「科学の文化的基底」プロジェクト学術公開講演会 (2000年10月28日)  
メインテーマ: 「科学技術はどこに向かうか?」
- 3) 「高度情報化社会の未来学」プロジェクト学術公開シンポジウム (2001年1月19日)  
メインテーマ: 「情報技術と人類の未来 - IT革命を超えて - 」

### (3) 一般学術公開講演会

- 1) 日本学士院との共催による一般学術公開講演会 (5月20日)  
河本一郎神戸大学名誉教授 : 「今後の日本の企業経営の在り方と商法改正」  
辻 廣東京大学名誉教授 : 「戦後の燃焼研究の推移 - 地球温暖化防止に関連して - 」
- 2) 奈良女子大学との共同研究に係る一般公開講演会 (2001年1月13日)

坂本信幸奈良女子大学教授 : 「万葉の富士山歌」

[ 4 ] 『親子』サイエンス・スクール

「少年・少女」サイエンススクールは、21世紀を担う子供達を対象に、著名な研究者との触れ合いをとおして創造性と広く科学への夢を導き出すことを目的として、1994年度から始めたセミナー事業である。

1997年度以降は、諸般の事情により従来の1泊2日のプログラムを変更し、日帰りの「親子」サイエンススクールとして企画・実施している。2000年度においては10月22日に開催した。

メインテーマ : 「君の不思議を探そう - 2000年宇宙への旅 - 」

参加者 : 近畿圏を中心とする小学校5年生・6年生の児童とその保護者54組  
111名

8. 情報出版事業及び研究成果の公表

情報出版委員会の検討結果を踏まえ、本研究所の知的資源である研究成果を内外に広く発信して学術の国際的な発展に資するため、インターネット等の情報メディアを活用した情報出版事業の充実に努め、高度情報化を背景とする情報出版活動の電子化を先取りする試みとしてインターネット出版に取り組んだ。

これらは、新たな著作権市場「コピーマート」を応用したビジネスモデルであり、特別研究「情報市場における近未来の法モデル」において情報社会の法的基盤となるべき法モデルの策定を目指す研究成果の活用するものである。

これらの情報出版事業の他に、広報事業についても積極的に展開した。

[ 1 ] 情報出版事業

( 1 ) 「高等研選書」

1999年度の財団創設15周年記念事業の一環として始めた高等研選書のインターネット出版は、2000年度において次のとおり発行した。

- 1) 「無機イオンと生命 - もう一つの生命 - 」江橋節郎著
- 2) 「科学と技術の間」西島和彦著
- 3) 「素粒子物理学の100年」南部陽一郎著
- 4) 「『関西空港』建設の事後評価」赤井浩一著
- 5) 「情報社会における著作権とビジネス」北川善太郎編
- 6) 「地球大気の研究 - 発展の一断面 - 」加藤進著
- 7) 「物質(もの)とは何か」井口洋夫著

( 2 ) 報告書 ( Report )

各種研究事業において個別に取りまとめられた論文もしくは論文集を、1995年度より「IIAS Reports」として不定期にて発行している。

1999年度以前に終了した一部の研究事業及び2000年度において研究事業が終了した課題研究については、その研究成果を2000年度内に取りまとめ、報告書 ( Report ) として発行した。

- 1) No.2000-001: 学術フォーラム「高度情報化社会の未来学」

2) No.2000-002: 公開セミナー「食糧生産と環境の調和を求めて - アジア・アフリカからの報告 - 」

3) No.2001-001: 「複雑系の秩序と構造」

## [ 2 ] 広報事業

### ( 1 ) 広報誌「こうとうけん」

2000年度の広報誌「こうとうけん」は、第18号(春号)及び第19号(冬号)を発行し、関係機関及び関係者に配布した。

### ( 2 ) 「IIAS NEWS LETTER」

年2回発行する広報誌「こうとうけん」の間をつなぐニュース紙として、「IIAS NEWS LETTER」を発行した。2000年度は第14号～第20号を発行し、関係機関及び関係者に配布した。

### ( 3 ) インターネット・ホームページにおける公表

本研究所の概要ならびに活動内容等を広く広報するために、インターネット上にホームページ開設している。本研究所の概要ならびに公開事業の広報、研究事業の概要紹介等を順次掲載し、内容の充実を図った。

ホームページのアドレスは、「<http://www.iias.or.jp/>」。

なお、年間を通しての外部からのアクセス件数は、約16,500件であった。

## 9. 委員会活動

### [ 1 ] 企画委員会

#### ( 1 ) 企画委員会の構成

企画委員は1999年度に引き続き、正副所長4名を含む18名による体制とした。

企画委員会は企画委員18名に特別委員7名を加えた計26名の構成とし、研究事業の企画・立案、助言及び評価など研究事業の推進を図った。

#### 1) 企画委員

沢田 敏 男	国際高等研究所所長	農業土木学
井口 洋 夫	国際高等研究所副所長	物理化学
北川 善太郎	国際高等研究所副所長	民法学
松原 謙 一	国際高等研究所副所長	分子生物学
青木 生子	日本女子大学名誉教授	上代文学
猪木 武 徳	大阪大学大学院経済学研究科教授	経済思想、労働経済学
岩槻 邦 男	放送大学教授	植物分類学
上山 安 敏	京都大学名誉教授	西洋法制史、法哲学
大野 豊	京都大学名誉教授	情報工学
岡田 益 吉	筑波大学名誉教授	発生生物学
チェン, ポール	東京大学大学院法学研究科教授	法哲学
中川 博 次	立命館大学理工学部教授	水域環境工学
中根 千 枝	日本学士院会員・東京大学名誉教授	社会人類学
野家 啓 一	東北大学大学院文学研究科教授	哲学
藤田 宏	東京大学名誉教授	関数解析学

三輪哲二	京都大学大学院理学研究科教授	数理解析学
覧具博義	東京農工大学工学部教授	光電子工学
渡部忠世	京都大学名誉教授	農学・作物学

2) 特別委員

金森順次郎	大阪大学名誉教授	物性物理学
坂井利之	京都大学名誉教授	情報工学
武部啓	近畿大学原子力研究所教授	遺伝学
中村桂子	生命誌研究館副館長	生命科学・生命誌
中川久定	京都大学名誉教授	フランス文学
本間正明	大阪大学大学院経済学研究科教授	公共経済学
吉田善章	東京大学大学院	数理科学

(2) 委員会活動

沢田所長を議長として企画委員会を定例的に開催した。十分な議案審議ならびに意見交換を行うため委員会は1泊2日の日程とし、2000年度には4回開催した。

- 1) 第1回企画委員会(5月19日～5月20日)
- 2) 第2回企画委員会(9月29日～9月30日)
- 3) 第3回企画委員会(11月24日～11月25日)
- 4) 第4回企画委員会(2001年2月16日～2月17日)

[2] 情報出版委員会

情報出版事業に関する企画・立案、具体的な推進方策及び諸課題について検討する情報出版委員会の充実を図った。特に学術出版の在り方、今後の高度情報化に備えたインターネット出版等学術情報の電子化について検討した。

さらに、本研究所自らが出版社として機能を発揮し、出版事業の発展を図るために、2000年10月に社団法人日本書籍出版協会に入会した。

(1) 情報出版委員会の構成

委員長	北川善太郎	副所長
委員	合庭惇	国際日本文化研究センター教授
	岡田益吉	企画委員
	上林弥彦	京都大学大学院情報学研究科教授
	杉田繁治	学術参与(国立民族学博物館副館長)
	三輪哲二	企画委員
	横山俊夫	学術参与(京都大学人文科学研究所教授)

(2) 委員会活動

- 1) 第1回情報出版委員会(9月29日)
- 2) 第2回情報出版委員会(11月24日)
- 3) 第3回情報出版委員会(2001年2月16日)

なお、情報出版委員会の開催に伴い、事前協議を行うための小委員会を9月22日、11月17日、2月9日に開催した。

10. 視察・見学者の受け入れ等

本研究所への理解を深めて貰う機会とするため、視察・見学者の受け入れや、お茶会の開催等を行った。

(1) 視察・見学者の受け入れ

事前の申し込みに基づき、国内外から可能な限り視察及び見学者の受け入れを行った。2000年度においては、視察・見学者は延べ11団体、総数は166名であった。

(2) お茶会及び呈茶

本研究所への理解を深め、併せて茶室「雅松庵」を利用して我が国固有の茶道文化に触れて貰う機会とするべくお茶会を3回開催し、またセミナーラウンジでの呈茶を4回行う等、計7回を数え、延べ131人が茶道文化に親しんだ。

以上